

「生命の尊さ」をテーマとする道徳科の授業開発

——「日本の生命観」の視点から——

森 一郎

はじめに

現在の道徳科では、指導すべき内容を4つの視点に分けて示しており、さらにそれぞれの視点ごとに22の内容項目(道徳的価値、徳目)を下記のように定めている¹。

A 主として自分自身に関すること

[自主, 自律, 自由と責任] [節度, 節制] [向上心, 個性の伸長] [希望と勇気, 克己と強い意志] [真理の探究, 創造]

B 主として人との関わりに関すること

[思いやり, 感謝] [礼儀] [友情, 信頼] [相互理解, 寛容]

C 主として集団や社会との関わりに関すること

[遵法精神, 公德心] [公正, 公平, 社会正義] [社会参画, 公共の精神] [勤労] [家族愛, 生活の充実] [よりよい学校生活, 集団生活の充実] [郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度] [我が国の伝統と文化の尊重, 国を愛する態度] [国際理解, 国際貢献]

D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること

[生命の尊さ] [自然愛護] [感動, 畏敬の念] [よりよく生きる喜び]

上記の中で、道徳科においては特に「生命」に関しては最も重要な課題として認識されており、学習指導要領の道徳科解説書(以下、『道徳科解説書』と記す)によれば「(生命の尊さという)内容項目は、道徳科内容全体に関わる項目であり、他の内容項目の指導においても、生命尊重に関連する事項を扱う場合には、この内容項目との関連を意識した指導

¹ 中学校では内容項目は22であるが小学校では低学年から高学年まで19から22と幅をもたせている。本発表では後で述べるように宗教的な内容も含まれるところから、児童生徒の理解力や認識力など発達段階を考慮して、中学生を対象とする。

に留意したい(傍点は筆者)」²として、「生命の尊さ」を特に重視している。

そこで本稿では、「生命の尊さ」の背景となっている生命観、特に「日本的生命観」に焦点を当て、そうした観点から具体的な道徳科の授業案を提示する。

1. 生命観とは

生命観とは、生命についての見方・考え方に関する用語であるが、はじめに生命観について複数の定義について検討する。

哲学や倫理学では、古代ギリシア語の語法に従って「生命」については二つの言葉が使われている。すなわち「ビオス(bios)」と「ゾーエー(zoe)」である。前者が「生物学(biology)」の、そして後者が「動物学(zoology)」の語源となっており、前者が個々人の生命ないし生活を、後者がその生命の底に流れている無限定の生命との区別にはほぼ対応している。そしてビオスが「死」を受け入れる有限の個体の生命であるのに対して、ゾーエーは無限の連続性をもった生命のことで「生命の根源」とも捉えることができる³。また哲学者の上田閑照は「宗教とは何か」と題する論考の中で「生きる」ことについて、「生命」、「生」、「いのち」と三つの表現に区別して次のように述べている。「『生命』とは生物一般に通じる生命を言い、『生』とは生活や人生としての人間的な生(人生と歴史的社会的生を含んで人間的な生)を言い、『いのち』とは、ものの『いのち』あるいは、ほとけの『いのち』とも言い得るように生物的生命や人間的文化的生とは質を異にした根源的な『いのち』という」⁴と述べて、「いのち」という表現に宗教的な意味を持たせている。さらに世界の伝統宗教の死生観について研究したヒロシ・オオバヤシも、人間の生を「有機体的・生物的な生」、「社会的・文化的生」、「超越的・理念的な

² 文部科学省(2018年)『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』教育出版, 63頁。

³ 野家啓一(2006年)『現代倫理学事典』弘文堂, 494頁。

⁴ 上田閑照(2002年)「宗教とは何か」『上田閑照集第11巻』岩波書店, 9頁。

生」の三つの次元でとらえており⁵、上田の区分とほぼ対応する。

このように「生命」については、二分法と三分法の違いはあるが、生物学的自然科学的な「生命」とそれを超越した根源的な「生命」と、大きく二つの区分ができる。また後者の超越的な「生命」は前者の生物学的な「生命」と区別するため「いのち」とひらかなで表現する場合がある。この「いのち」について宗教学者の池上良正は『『いのち』は必ずしも宗教用語ではないが、すでにそれ自体のうちに、個々の生命体や現生の日常性を突破するような超越的イメージが塗りこめられていた。それはさまざまな文脈において神、仏、霊、魂、道などの観念と重なったり関連づけられたりすることが多かった』⁶と述べており「いのち」という表現が宗教と関係することを示唆している。

さらに「生命」と「いのち」を比較すると、次の様にまとめることができる。生命には終わりがあるが、「いのち」は終わりがなく永遠に生き続ける。すなわち「有限性」対「無限性」と表すことができる。また生命は客観的に測ることができる。たとえば生命の終わりとして心臓の停止や脳死の判定がある。一方「いのち」は概念であって測ることができない。すなわち「客観性」対「主観性」と表すことができる。また清水寺貫主の森清範は「見える命」と「見えないいのち」と表現している。森は「学生さんに話す時に、いのちには見える命と、見えないいのちがあると話しています。(中略)この見えないいのちに『おおきに』と言って感謝するのが大人としての一つの条件だと思うのです。この考え方は主張が違おうが、主義が違おうが、民族が違おうが、どこへ持っていっても通用するはずです。お互いが『見えないいのち』によって支えられているのです」⁷。

さらに「生命」と表裏一体となって使用されるのが「死」の問題であ

⁵ ヒロシ・オオバヤン編、安藤泰至訳（1995年）『死と未来の系譜』時事通信社、12-13頁。

⁶ 池上良正（2004年）「〈生命—生老病死の宇宙〉序論」『岩波講座宗教 第7巻生命』、6頁。

⁷ 森清範（2014年）「現代人に必要な祈り」『会報』58号、兵庫・生と死を考える会、6頁。

る。『道徳科解説書』では、内容項目「生命の尊さ」の説明として「身近な人の死に接したり、人間の生命の有限さやかけがえのなさに心を揺り動かされたりする経験」⁸についても述べており、「いのち」と「死」とは同時に視野に入れなければならない事項といえる。

2. 日本的生命観とは

「生命の尊重」の背景となっている生命観を考える場合、生徒にも身近に感じられる「日本的生命観」について検討する必要がある。

人間を初めとして、すべての生き物は命をもっている。生き物が死ぬことによって、命は消滅し自然科学的には単なる物体となってしまう。しかしながら多くの日本人は肉体(命)が消滅しても、前章の表現を借りれば、「いのち」は存在すると考えられている。ここでの「いのち」とは「たましい(魂)」とも表現される場合もある⁹。

仏教には「草木国土悉皆成仏」という言葉がある。すなわち草や木は言うまでもなく、国土さえも「生きとし生けるもの」として生きており、成仏できるとされている¹⁰。

しかしながら、生物にも魂があるという考え方は、仏教伝来以前にも日本に存在していたとする説もある。宗教学者の山折哲雄は「仏教が日本に入ってくる以前の日本列島人、例えば縄文から万葉に至る時代のこの日本列島に住む人々の信仰はいったい何だったかを考えますと、これは明らかに、自然、万物の中に生命があるということを感じていた、そういう生き方をしていたと思うのです」¹¹と述べている。

⁸ 文部科学省 (2018年), 62頁。

⁹ ことわざに「一寸の虫にも五分の魂」とあるように、虫の中にも「いのち」を認めていた。また小林一茶の俳句にも「やれ打つな 蠅が手をすり 足をする」も、虫の中に「いのち」を感じていたのでは。

¹⁰ 梅原は「『草木国土悉皆成仏』という言葉で表現される天台本覚思想こそ、日本仏教の根本思想である」と述べている。梅原猛 (2013年)『人類哲学序説』岩波新書, 13-14頁。また岡田も日本的生命観として「草木国土悉皆成仏」を指摘している。岡田真美子 (2013年)「山川草木のいのち—草木国土悉皆成佛と日本的生命観」『小さな小さな生きものがたり—日本的生命観と神性』昭和堂, 6頁。

¹¹ 山折哲雄 (2006年)「現代日本人とその宗教心」『日本の精神性と宗教』創元社, 84頁。

自然や万物の中に生命があるという考え方は、一般的には「アニミズム」とよばれている。そしてこのアニミズムは古来より全世界で見られた現象であるが、和辻哲郎によると近代社会において古来よりのアニミズム的な信仰が残っているのは日本だけだと、次のように述べている。「我々のたどり得る最も原始的な信仰様式が、仏教やキリスト教のごとき進歩せる信仰様式とともに現に働いている。しかもそれは仏教のごとき世界宗教と相並んで千何百年かを通じる一つの潮流として相続し発展して来ているのである。もし青年ヘーゲルがなしたように民族宗教をその『祭り』によって量るならば、日本民族はその全体性を表現する原始的な祭りをついに失うことがなかったのである。かかることは異教を殲滅したキリスト教の下においては起こらなかった。だから現代の文化民族においてその原始的な信仰様式を保存している者は(日本以外)どこにもない(カッコ内は筆者が補足)」¹²と。

さらに現代社会においても、まったく同様の現象が見られるとして、宗教学者の久保田展弘は「日本人は生きとし生けるものすべてに、いや、無生物にも靈魂を認めてきた。この観念は、誰もが携帯電話をもち、パソコンを使う時代にもなっても、そう大きくは変わらないのではないだろうか。いまま針供養や魚供養があり、実験用動物の供養など、供養の対象に制限はない。特定の神・仏に信仰をさだめず、しかもモノにおよんで靈魂を意識することがある。この靈魂観こそが日本人の精神性の特徴を示すキーワードなのだ」¹³と述べている。

以上の論点を整理すると「日本の生命観」とは、肉体的な生命とは別に、前章の言葉を借りれば、「ゾーエー」や「いのち(魂)」が存在し、それは生物にだけでなく、「もの」にも存在するという生命観である、とまとめることができる。

3. 道徳科の教材にみられる生命観

それでは、道徳科の教科書では、「生命の尊さ」としてどのような教材

¹² 和辻哲郎 (2002年)『新編 日本精神史研究』燈影社, 241頁。

¹³ 久保田展弘 (2008年)『原日本の精神風土』NTT出版, 252-253頁。

が取り上げられているであろうか。またそれらの教材は「日本の生命観」を考慮に入れているであろうか。

次の表1は道徳科になって初めて使用された8社計24冊の教科書における「生命の尊さ」の内容を一覧表にしている。

表1 中学校の教科書別の「生命の尊さ」の内容

| 発行会社 | 年 | 内容 |
|---------|---|-------------------------|
| 光村図書 | 1 | 震災死, 捨てられた犬, 末期がんの女性の死 |
| | 2 | 出産, 臓器提供, 「生きる」ということ |
| | 3 | 出産, 延命措置(命の選択), 命の大切さ |
| 教育出版 | 1 | 誕生, 生物のいのち, 死生観 |
| | 2 | ダウン症児の生と死, 国境なき医師団 |
| | 3 | 餓死寸前の少女, ニワトリの死, 臓器提供 |
| 廣済堂あかつき | 1 | 誕生, 愛馬の死, 震災での母の死 |
| | 2 | 難病者の生き方, 母の死, 延命措置 |
| | 3 | 末期がんの人の生き方, 臓器移植, 漂流者 |
| 日本教科書 | 1 | 古い写真, 母の入院 |
| | 2 | ドクターヘリ, おばあちゃん宅への訪問 |
| | 3 | 少女の死, 臓器移植, 死を考えた女子高生 |
| 学校図書 | 1 | 出産, 母の死 |
| | 2 | 豚の解体, 脳死(臓器移植) |
| | 3 | 骨髄移植, おくりびと |
| 東京図書 | 1 | 「いのち」について, 骨髄バンク, 友人の死 |
| | 2 | 末期がんの人の生き方, 出産, 遺族からの手紙 |
| | 3 | 出産, 漂流者, 難病者の生き方 |
| 日本文教出版 | 1 | 誕生, 死を待つ人, 震災死 |
| | 2 | 愛犬の死, 出産, 友人の死 |
| | 3 | ユダヤ人の悲劇, 臓器提供, 震災死 |
| 学研教育みらい | 1 | 出産の時, 難病の子供, 捨て犬 |
| | 2 | 出産(死産), 安楽死, 緒方洪庵 |
| | 3 | 余命宣告, ヤギを食べる, 臓器提供 |

表1を見ると, 教材としては, 出産から死まで取り上げられているものの, 特に「日本の生命観」に基づいたような教材は見られない。

今回の研究で「日本の生命観」に焦点を当てたのは, 一つには日本における「生命の尊さ」の授業において, 「日本の生命観」に基づく教材であれば生徒が身近に感じられるのではないだろうか, という点と, 二つ目に

は「日本の生命観」に基づく授業は、道徳科の視点の「C 主として集団や社会との関わりに関すること」の中の内容項目である「我が国の伝統と文化の尊重，国を愛する態度」にも共通の話題を提供できる¹⁴と考えたからである。

4. 「生命の尊さ」に関する授業開発の内容と視点

「生命の尊さ」については『道徳科解説書』によると「生命を尊ぶとは、かけがない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることを素直に応えようとする心の現れ」と説明されている¹⁵。また指導に当たっては、「人間の生命のみならず、身近な動植物をはじめ生きとし生けるものの生命の尊さに気付かせ、生命あるものは互いに支えあって生き、生かされていることに感謝の念をもつよう指導することが重要な課題」となると指摘している¹⁶。

以上の点、そして「日本の生命観」の観点から、動物に対する生命(いのち)への畏敬と慰霊及び感謝の念を育むことを主題とする道徳科の授業開発を行った。

- ①主題名 動物の生命(いのち)に対する畏敬と慰霊
- ②内容項目 生命の尊さ
- ③資料名 鯨の法会
- ④ねらい 古捕鯨基地であった山口県の仙崎に設置されている鯨墓や、今でも同地で行われている鯨の法会を通して、死しても残るいのち」が宿る動物(鯨)に対する感謝の心や、その慰霊の気持ちを感じとり、日本人の生物に対する畏敬や慰霊の気持ちを理解し、共感する心を育む。
- ⑤主題設定の理由

¹⁴ 文部科学省(2018年)。「生徒の人間的な成長をどのように図り、どのように道徳性を養うかという観点から、幾つかの内容を関連付けて指導することが考えられる」21頁。

¹⁵ 同上, 62頁。

¹⁶ 同上, 63頁。

a. ねらいとする価値について

自然愛護や環境保全については、社会科や理科の中で「持続可能な社会」や「地球にやさしく」などのスローガンと共に授業でもよく取り上げられている。道徳教育に関しても、動物の命や植物の命についても多くの教材や実践例がある。ところが従来の「生命の尊さ」については、現在の生きている命についてであって、亡くなった動植物の「いのち」までは及んでいない。また亡くなった動植物の「いのち」に触れることがあったとしても、単に「悲しい」、「残念だ」で終わってしまい、「いのち」への畏敬や「感謝」の念にまでは至らなかった。

本授業案は、山口県の仙崎で行われている「鯨の法会」を対象としている。山口県の仙崎は古式捕鯨基地として知られている土地である。また同地出身の詩人である金子みすゞの「大漁」と題する詩でも知られるように漁師町でもある。古式捕鯨が姿を消してから100年余り経つが、1679年から向岸寺で始まった鯨の法要は、今も毎年春に行われている。捕った鯨には一頭一頭に戒名がつけられ、「鯨鯢過去帳」が整備され鯨の位牌もある。こうした例は、世界にはないという。住民たちの信仰心は篤く、海への感謝の気持ちを忘れない。地域の助け合いや伝統の継承もごく自然に行われており、日本人の自然観、生命観、宗教観を示す教材となる。

本授業案はこうした点に焦点を当てている。かつて町の生活源であった動物（鯨）に対して住民たちは畏敬の念を抱いており、その「いのち」に対して畏敬の気持ちと慰霊の気持ちをもっている。

本授業案はこのような事実を踏まえて、「生命の尊さ」と同時に生物に対する「畏敬」や「慰霊」の気持ちを理解し、共感する心を育てる授業案となっている。

b. 教材について

本授業の教材は4枚の写真と4編の文字資料から構成されている。写真は鯨の位牌と過去帳（写真1）、鯨の墓（写真2）、向岸寺における鯨の法会の様子（写真3）、現在も行われている鯨の法会のお知らせ看板（写真4）の4枚である。文字資料1は、本授業の中心教材で、鯨の法会につ

いての説明文である。資料2は金子みすゞの「大漁」と題する詩であり、資料3は同じく金子みすゞの「鯨法会」と題する詩である。資料4は、授業の終末で使用する教材で、本授業のまとめの文章である。



写真1



写真2



写真3



写真4

資料1「鯨の法会」

山口県には日本海に面した美しい漁師町があります。長門市の仙崎です。この仙崎は又、詩人の金子みすゞが生まれた土地としても有名で、みすゞが「大漁」の中で歌っているように、かつては漁で、毎日が祭りのように賑わったと言われています。

仙崎は又、古式捕鯨基地としても有名で、「一頭捕れば、七浦賑わう」といわれた時代もありました。鯨は、肉はむろんのこと、皮、骨、歯、髭、内臓まですべて使うことができたからでした。また鯨には霊力があ

ると信じられてきました。岸にやって来るときには、鯨から逃げようとして、魚群も到来し豊魚となるそうです。仙崎の人々は、こうした自然の恵みに感謝すると同時に、その命に対しても特別な思いをもっていました。鯨は長距離にわたって南北に移動し、南下して子供を産みます。長門の海は、その途中に当たるわけですが、子供を身ごもった母鯨が網にかかることがあります。胎内から出てきた赤ちゃん鯨の姿に、漁師たちは居たたまれない気持ちになったようです。そうしたこともあり、胎児たちが故郷の海を臨めるようにと、高台に2mを有に超える大きな「鯨墓」を作って、その霊をとむらったといわれています。愛媛大学の教授で、鯨文化を研究している細川隆雄氏は、「かつて三度墓を訪れたが、いつも真新しい花が供えられ、ゴミひとつ落ちていない」と、新聞に記事を寄せています(注1)。なお、この鯨墓は、昭和50(1975)年に山口県の有形民俗文化財に指定されました。また捕った鯨には一頭一頭に戒名をつけ、鯨鯢過去帳に記帳し、鯨の位牌まで作って鯨墓の近くの向岸寺に安置しておりますが、こうしたことは、世界にも例を見ないといわれています。

現在、仙崎では捕鯨は行われていませんが、向岸寺では、毎年春に鯨の法会が実に300年以上にわたって、今も連綿と続いているのです。こうした信仰心篤い仙崎の風土が、優しさや慈しみに満ちたみすゞの詩の原点ではないでしょうか。 注1 「日本経済新聞」2014年10月2日付文化面

資料2 金子みすゞ「大漁」

朝焼け小焼けだ 大漁だ
大羽鰻の大漁だ。
浜は祭りの ようだけど
海のなかでは 何万もの
鰻のとむらい するだろう。

金子みすゞ、尾崎眞吾(2012年)『みすゞと海と』二玄社、30頁。

資料3 金子みすゞ「鯨法会」

鯨法会は春のくれ、海に飛魚採れるころ。
 浜のお寺で鳴る鐘が、ゆれて水面をわたるとき、
 村の漁夫が羽織着て、浜のお寺へいそぐとき、
 沖で鯨の子がひとり、その鳴る鐘をききながら、
 死んだ父さま、母さまを、こいし、こいしと泣いています。
 海のおもてを、鐘の音は、海のどこまで、ひびくやら。
 金子みすゞ、尾崎眞吾（2012年）『みすゞと海と』二玄社、35頁。

資料4 まとめ

人間は大自然からの無限の「
 」を受けながらも、そこに生きる動植物を「
 」にせざるを得ないことに対する痛みの気持ちをもっている。そうした中で、生物に対する「
 」や「
 」の形として、日本文化の中にその形跡を残している。私たちも生き物に対して感謝の気持ちちを忘れてはいけない。

⑥授業案

| 段階 | 学習活動 | 主な発問と予想される生徒の考え | 指導上の留意点 |
|----|--------------------|---|---|
| 導入 | 「位牌」について理解し、興味をもつ。 | ○仙崎にある向岸寺の位牌の写真1を見せて、何であるかを問う。 ・鯨の位牌 ○この位牌がなぜ作られたかが本時のテーマとなる。 | 「位牌」自体について理解のない生徒が多いと思われるので、その説明も丁寧にする。 |
| 展開 | 資料1「鯨の法会」の理解。 | ○資料1の「鯨の法会」を教師が読む。 ○資料1の内容をさらに深く理解するため、向岸寺の鯨墓、鯨の法会の様子、鯨の法会のお知らせ看板などの写真2～3を提示して、内容を補足する。 Q1. 仙崎の人々の鯨に対する気持ちは、具体的にどのような形で表れているでしょう。 | ・「法会」の意味を理解させる。 ・「鯨鯨」の意味を理解させる。 ・「鯨の法会」の内容をまとめさせ、具体的な「もの」や「行事」として理解させる。 |

| 段階 | 学習活動 | 主な発問と予想される生徒の考え | 指導上の留意点 |
|----|----------------|--|--|
| 展開 | 金子みすずへの理解。 | <ul style="list-style-type: none"> ・鯨墓をつくった ・鯨の過去帳がある ・鯨の位牌がある ・捕鯨業がなくなった現在でも、鯨の法会が行われている。 | |
| | 資料2の「大漁」への理解。 | <p>○漁師町であり、捕鯨の町であった仙崎で生まれ育った金子みすずの生涯を簡潔に紹介。</p> <p>○資料2の「大漁」を教師が読む</p> <p>Q2. 「とむらい」を漢字で書きなさい。またどのような意味でしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弔い 意味：死を悲しみ悼むこと。葬式のこと。 | 金子みすずの詩には、仙崎での経験が反映していることを理解させる。 |
| | 資料3の「鯨法会」への理解。 | <p>○資料3の「鯨法会」を教師が読む</p> <p>Q3. なぜ、漁夫は羽織を着て寺に行ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁夫にとって生活の糧である鯨に対する感謝と慰霊、そして鎮魂の気持ちを羽織という正装を着ることで表したので。 | 人間はイワシの大漁だと喜んでいますが、イワシにとっては死を意味する。つまりイワシという生物の犠牲の上に人間の生活が成り立っていることを理解させる。 |
| | 鯨の気持ちになって考える。 | <p>Q4. 次に鯨の気持ちになって考えましょう。鯨は仙崎の人々に、どのような気持ちを抱いていると思いますか。その理由も考えましょう。最初に一人で考え、次に隣の人と意見交換をなさい</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長い間に亘って鯨を祀ってくれて感謝している。 ・有難い理由 ・鯨墓、鯨の過去帳・位牌があり、捕鯨業が終わった後も鯨のことを思っているから。 ・羽織をきて鯨の法会に来てくれて | 「悼む」の意味の理解をさせる。羽織の写真を見せ、正装であることを理解させる。「慰霊」「鎮魂」の意味の理解をさせるこの詩には、鯨の子供の気持ちも読み込まれていることも理解させる。資料1だけでなく、資料2、資料3の金子みすずの詩にも着目させ |

| 段階 | 学習活動 | 主な発問と予想される生徒の考え | 指導上の留意点 |
|----|--|--|---|
| 展開 | | <p>いるから。</p> <p>Q5. 私たちは、かつて命があった生き物を毎日食して自分の命を維持しています。つまり生き物の犠牲の上に私たちの命が成り立っているといっても過言ではありません。そうした意味から、私たちは生き物に対してどのような気持ちをもって接すればよいでしょうか。最初に一人で考え、次に四人で一つのグループをつくり、お互いの考え方を分かち合いなさい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事の時は、食べ物に感謝する。 ・食事の時に「命を頂いている」という気持ちで食べる。 ・なんでも「おいしいおいしい」という気持ちで食べる。そうすると、命がない生き物も、喜んでくれるのではないか。 | <p>る。</p> <p>この部分は「考え・議論する道徳」の対象となるので、出来るだけ時間を確保する。</p> |
| 終末 | <p>資料4の文章を読んで本時のまとめとする。本日の授業で学んだことを書く。</p> | <p>○まとめとして、資料4を読み、空欄に言葉を入れて、本時の内容の再確認をする。</p> <p>○本日の授業で学んだことを書かせる。</p> <p>人間は大自然からの無限の「恩恵」を受けながらも、そこに生きる動植物を「犠牲」にせざるを得ないことに対する痛みの気持ちをもっている。そうした中で、生物に対する「慰霊」や「鎮魂」の形として日本文化の中にその形跡を残しているのである。(資料4を使う)</p> | <p>仙崎での鯨に対する鎮魂と慰霊の気持ちを再度確認すると同時に、その地の出身者である金子みすゞの生物に対する優しさの溢れた詩についても、再確認して授業を終える。</p> |

本授業案は、「鯨の法会」を通して日本人の自然観、生命観、宗教観について理解し、それに共感する心を育てるものである。すなわち先人の残した有形無形の文化遺産の中に優れたものを見出し、そのことを通じ

て、生き物の中の「いのち」に対する畏敬の心や、慰霊、感謝の気持ちを理解し、共感できる心を育てていこうとするものである¹⁷。

導入部では、仙崎にある向岸寺の位牌の写真を見せ、これは何であるかの問いかかけをし、授業に対する興味・関心を喚起させる。ただ、位牌自体について理解のない生徒が多いと思われるので、通常の仏壇にある位牌の写真を見せるなどして、説明も丁寧にしておく。

展開部の初めとして、資料1の「鯨の法会」を教師が読む。資料1の内容をさらに深く理解するため、向岸寺の鯨墓のある写真を提示し、資料の内容について実感がもてるようにする。次に本授業のねらいである仙崎の人々の鯨に対する気持ちが表れている具体的なモノや行いについて、資料の中から生徒に見つけ出させる。これによって、仙崎では既に捕鯨業は行われていないにもかかわらず、鯨に対する供養（法会）が行われていることを知り、鯨に対する慰霊や鎮魂の気持ちを、生徒は感じ取ることができる。続いて郷土出身の詩人である金子みすゞの理解へと移る。みすゞの詩には、漁師町であり、捕鯨の町で育った経験が元になった作品が多いことを説明し、彼女の生涯を簡潔に紹介する。次にみすゞの詩である資料2の「大漁」を教師が読む。詩のなかで「とむらい」は、ひらかなで書かれているので、漢字に直させ、その意味を確認する。人間にとって、イワシが沢山捕れる「大漁」は喜びであるが、イワシにとっては「死」を意味することであり、イワシという生物の犠牲の上に人間の生活が成り立っていることを理解させる。つまり食事においても生物の命を食することで、私たちの命が維持されていることに気づかせる。続いて、みすゞの詩である資料3の「鯨法会」を教師が読む。そして「なぜ、漁夫は羽織を着て寺に行ったのか」と問い、漁夫にとっては生活の糧である鯨に対する感謝と慰霊、そして鎮魂の気持ちを、羽織という正装を着ることで表していることを理解させる。また、

¹⁷ 鯨の供養と道徳教育との関係についての先行研究には、丸田の論考がある。丸田は「小川嶋鯨鯢合戦」と名づけられた捕鯨図や、向岸寺の供養の例を取り上げているものの、具体的な授業展開例は示していない。丸田健（2012年）「道徳教育と自然とのかかわり」『道徳教育を考える—多様な声に応答するために』法律文化社、67-69頁。

この詩には、鯨の子供の気持ちも読み込まれていることを確認する。仙崎の人々は、そうした鯨の子供に対しても、細やかな慰霊の気持ちをもっていたことを理解させる。

展開部後半の Q4 では、鯨の気持ちになって仙崎の人々への思いを推察している。この部分は道徳科の特徴の一つである「考え、議論する道徳」の部分でもあるので、少し時間をとる。これによって、仙崎の人々の鯨に対する思いを読み取っていくだけでなく、鯨からの気持ちを推察していくことによって、畏敬の念を深めることになる。最後の Q5 で、本授業で学んだことを自ら考え反省すると同時に、他の生徒とも考えを分かち合い、感謝や慰霊の気持ち、さらには仙崎の人々にとって鯨は偉大で敬うべき畏敬の対象であることを感じとる。

終末の部では、資料 4 を読み、空欄になっている部分に入る言葉を考えさせる。完成版は以下の通りであり、これは本時のまとめにもなっている。

【人間は大自然からの無限の「恩恵」を受けながらも、そこに生きる動植物を「犠牲」にせざるを得ないことに対する痛みの気持ちをもっている。そうした中で、生物に対する「慰霊」や「鎮魂」の形として、日本文化の中にその形跡を残している。私たちが生き物に対して感謝の気持ちを忘れてはいけない】

こうして仙崎の人々の鯨に対する慰霊と鎮魂の気持ちという「いのち」に対する思いを再度確認すると同時に、その地の出身者である金子みすゞの生物に対する優しさの溢れた詩についても、再確認して授業を終える。このように本授業案は「生命の尊さ」と同時に、「日本の生命観」をテーマとしているところから内容項目 C の〔我が国の伝統と文化の尊重〕とも連携させる構成となっている。

結語

本稿では、道徳科における「生命の尊重」の授業を提案している。その際、従来から道徳科ではあまり言及されなかった「日本の生命観」の視点も取り入れ、具体的な指導案(教案)を提案している点が本研究の特

徴となっている。また道徳科の内容項目の一つである「我が国の伝統と文化の尊重」とも連携させる構成となっていることも本研究の特徴の一つである。

[参考文献]

池上良正（2004年）「〈生命—生老病死の宇宙〉序論」『岩波講座宗教 第7巻生命』岩波書店。

久保田展弘（2008年）『原日本の精神風土』NTT出版。

丸田健（2012年）「道徳教育と自然とのかかわり」『道徳教育を考える—多様な声に応答するために』法律文化社。

文部科学省（2018年）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』文教出版。

森清範（2014年）「現代人に必要な祈り」『会報』58号、兵庫・生と死を考える会。

野家啓一（2006年）『現代倫理学事典』弘文堂。

岡田真美子（2013年）「山川草木のいのち—草木國土悉皆成佛と日本の生命観」『小さな小さな生きものがたり—日本の生命観と神性』昭和堂。

ヒロシ・オオバヤシ編、安藤泰至訳（1995年）『死と未来の系譜』時事通信社。

上田閑照（2002年）「宗教とは何か」『上田閑照集第11巻』岩波書店。

梅原猛（2013年）『人類哲学序説』岩波新書。

和辻哲郎（2002年）『新編 日本精神史研究』燈影社。

山折哲雄（2006年）「現代日本人とその宗教心」『日本の精神性と宗教』創元社。